

# 感覚動詞に後置される「-到、-見、」(その1)

成 戸 浩 嗣

キーワード

- (1) 伝聞
- (2) 客体の概念
- (3) 意志性
- (4) 内容理解
- (5) 動作性

## 0. はじめに

中国語の感覚動詞「看、听、闻」に対しては、動作の結果を表わす「-到、-見」を補語として後置することができる。

例えば

- (1) 他看到了桌子上的黑面包。
- (1') 他看见了桌子上的黑面包。
- (2) 你的话我们听到了。
- (2') 你的话我们听见了。
- (3) 我一进屋就闻到了一股酸味儿。
- (3') 我一进屋就闻见了一股酸味儿。

における「看到、听到、闻到」及び「看见、听见、闻见」は、それぞれ「看、听、闻」という動作及びその結果としての動作の実現を表わしているが<sup>1)</sup>、同じく動作の実現を表わすといっても、「-到、-見」のいずれが後置されるかによって、表現される出来事そのものが異なったり、あるいは話者の表現意図・ニュアンスが異なったりする。しかし、このような「-到」と「-見」との相違について詳しく論じた先行研究は、現在のところ見あたらない。

本稿は、「-到」と「-見」との相違についてのネイティブ・チェックの結果をもとにして、それらの結果を理論づける形で考察を進めていくことにより、いままで明らかにされなかった「-到」、「-見」の特徴を明らかにすることを目的とする。考察にあたっては、「看、听、闻」

が、「-到、-见」と組み合わせられた場合に見られる特徴を明らかにし、しかる後に「-到、-见」それぞれの特徴をまとめるという手順をとることとする。但し、「看」については、「看」と同様に視覚を用いた動作を表わす動詞「见」が存在し、「见」は「见到」という表現形式をとることができるため、考察の内容が「看」と動詞「见」との相違にまで及ぶという点を考慮して、先に「听、闻」と「-到、-见」との組み合わせについての考察を行ない、しかる後に「看」と「-到、-见」との組み合わせについての考察を行なうこととする。

#### 1.1 「伝え聞いた内容」を表わす「听到」

(2)と(2)′とを比較すると、以下のような相違が見られる。

(2)は、自分の耳で直接「你的话」を聞いた場合、人から間接的に「你的话」を聞いた場合のいずれにも用いることができ、後者の場合には、例えば

(2)″ 你的话我们听**到了**，老王已经告诉我们了。

のように後件を続けることができる。これに対し、(2)′は、自分の耳で直接「你的话」を聞いた場合には用いることができるが、人から間接的に「你的话」を聞いた場合には用いることはできない。従って、(2)′に対しては、例えば

(2)″″ 我们刚才正好在隔壁，你的话我们全**听见**了。

のように、自分の耳で直接「你的话」を聞いたことが明らかな内容を表わす前件を附加することはできるが<sup>2)</sup>、「老王已经告诉我们了」を後件として続けた場合には不自然な表現とされる。

また、例えば

(4) 我在城里听**到**了一些风声。

(4)′ 我在城里听**见**了一些风声。

の両者を比較した場合、「风声」は、人から人へ伝わった結果として主体の耳に到達するものであって、主体が間接的にそれを聞くものであるため、(4)′よりも(4)の方が better であるとされる<sup>3)</sup>。

従って、

(5) 他站起身把桌上的东西卷成一卷，往床上一扔，严肃地看着我问：“仅仅是因为缺钱才干这个的呢？”“当然不光是为了钱。你没听**到**风声？奚流同志已经下了命令，以后不许我写文章了。”我说。

(5)′ 他站起身把桌上的东西卷成一卷，往床上一扔，严肃地看着我问：“仅仅是因为缺钱才干这个的呢？”“当然不光是为了钱。你没听**见**风声？奚流同志已经下了命令，以后不许我写文章了。”我说。

のように、主体が第三者を通して間接的に「风声」を聞くことが明らかな内容の文章の場合には、「听见」を用いた(5)′よりも「听到」を用いた(5)の方が better であるとされ、さらに、

(6) 经常听**到**人们说起日本社会的结构有某些与家庭组织相似的地方。

(6)'经常听见人们说起日本社会的结构有某些与家庭组织相似的地方。

の両者を比較すると、「日本社会的结构有某些与家庭组织相似的地方」という内容は、いわば一般的に、多くの人々によってそのように言われているものであるため、話者が直接それらを耳にしたものとして表現する(6)'よりは、間接的に聞いたものとして表現する(6)の方が better であるとされる。

「听到」と「听见」との間には上記のような相違が見られるため、以下の文章における「-到」を「-見」に置き換えると不自然な表現とされる。

(7)例如文戏《将相和》说的是赵国的蔺相如不顾秦国的威胁，保住了国宝和氏璧，因此赵王封蔺氏做了上卿。大将军廉颇很不服气，扬言要么不碰到蔺相如，要碰到的话，非得给他点儿颜色看看。蔺相如知道后，就处处有意避开，以免遇见廉颇。部下以为这么做丢脸得很，蔺相如却笑笑说，秦国之所以不敢来，就因为赵国武有廉颇，文有蔺相如。如果我俩闹不和，秦国就会来打赵国了。廉颇听到这话，顿时清醒过来，赶忙去蔺相如那儿请罪。两人从此成了好朋友。

(7)の「-到」を「-見」に置き換えると、「廉颇」が「蔺相如」の話を直接その場で耳にしたことを表わす表現となるが、文章全体の内容から、「廉颇」が「蔺相如」の話を直接その場で聞いたのではなく、第三者から間接的に伝え聞いたのであることは明らかであるため、この内容と「听见」という表現形式との間に矛盾が生じる。「廉颇听见这话，顿时清醒过来，赶忙去蔺相如那儿请罪。」という表現は、(7)のような文章の中では不自然な表現とされるが、単独で用いられる場合には、「廉颇」が「蔺相如」の話をその場で直接に聞いたことを表わす自然な表現として成立する。

一方，

(8)这么大声说话，里面会听得到的。

(8)'你这么大声说话，里面会听得见的。

(9)响声很大，很远都能听得到。

(9)'响声很大，很远都能听得见。

のような表現の場合には，客体「話」，「响声」が直接主体の耳に入ることが明らかであるため，「听到」を用いた(8)，(9)よりは，「听见」を用いた(8)'，(9)'の方が better であるとされ，

(10)她请求我看在她和他们的儿子小鯤的面上，原谅他的文化大革命中对我所做的一切。

我答应了，并保证尽量照顾小鯤。此刻，我好像听到她的恳切的语言：“把过去的恩怨都忘了吧，孙悦！”

(10)'她请求我看在她和他们的儿子小鯤的面上，原谅他的文化大革命中对我所做的一切。

我答应了，并保证尽量照顾小鯤。此刻，我好像听见她的恳切的语言：“把过去的恩怨都忘了吧，孙悦！”

も，主体「我」が「把过去的恩怨都忘了吧，孙悦！」という「她」の声を聞いたような気がしたという内容から，たとえその声が聞こえたのが錯覚であっても，具体的な言葉をあ

たかも実際に聞いたように描写している、一種の文学的な技巧を聞いた表現であることは明白であるため、「听见」を用いた(10)の方が「听到」を用いた(10)よりも better であるとされる。

以上のことから、「听见」は、客体としての言語あるいは音声を、主体が聴覚を通して直接耳にすることを表わす表現形式であるのに対し、「听到」は、客体としての音声あるいは言語を主体が直接耳にすることを表わす場合にも、第三者を通した情報として間接的に耳にすることを表わす場合にも用いることができる表現形式であるということが明白となった。このことは換言すれば、「听见」は、それが聴覚器官によって直接的にとらえられる音声を客体とすることはできるが、第三者によって間接的に伝えられる情報を客体とすることはできないのに対し、「听到」は、直接的にとられられる音声、間接的に伝えられる情報のいずれをも客体とすることができるということである。主体が第三者を通して間接的に情報を耳にする場合、「听到」は、主体の聴覚器官によって「聞く」ことを表わすと同時に、頭脳によって「情報をキャッチする」ことをも表わすという点において、聴覚のみを用いて「聞く」ことを表わす「听见」とは異なる。

「听到」と「听见」との間にこのような相違が生じるのは、「-见」は前の動詞が表わす動作の結果を主体の感覚によってとらえることを表わすという性格を有するのに対し、「-到」はそのような性格を有していないということに起因する。このことは、「-到」、「-见」のそれぞれが組み合わせられる動詞を比較すると明白であり、「-见」は、通常は「看、听、闻」のようないわゆる感覚動詞に補語として後置されるのに対し、「-到」は、上記のような、感覚動詞にも、あるいは「找、买、抓、收、借、捡、吃」のような非感覚動詞にも補語として後置されるという相違が見られる<sup>4)</sup>。

また、以下の表現例においても、(8)、(8)′～(10)、(10)′の場合と同様に、「听到」よりは「听见」を用いた方が better であるとされる。

(11) 听到外面有脚步声，就出门去看，可是我出去以后，脚步声远了，没有看到是谁。

(11)′ 听见外面有脚步声，就出门去看，可是我出去以后，脚步声远了，没有看见是谁。

(11)と(11)′とを比較すると、前者の場合には、「家の外で足音がしたのを聞いた」のは、もしかしたら主体である「我」の勘違いであって、実際には誰も歩いてはおらず、足音はしていなかったか、あるいは他の音を足音と聞き間違えたという可能性があるのに対し、後者の場合には、確かに誰かが歩いていて足音がしていたことを前提とした表現であるという相違が見られる。前述したように、「-见」は、動作の結果が感覚によってとらえられたことを表わすが、「主体の勘違いによって足音らしき物音を聞いた」という場合は、聴覚のみではなく主体の頭脳の働き、すなわち「思いこみ」も加わってそのようなことが起こるのであるため、「听见」よりも「听到」を用いた表現の方が better であるとされるのである。(11)、(11)′はいずれも、「おもてで足音がしたので出てみたが、私が出た時には、足音はすでに遠ざかって人影は見えなかった」という内容を表わし、このような場合には、通常は、主体である「我」がおもてに出る前に誰かが歩いていたらと解するのが妥当であるため、(11)よりも(11)′の方が better

であるとされる。

## 1.2 客体概念の抽象性・具体性

主体が客体としての情報を入づてに聞いた場合、その情報は、具体的な音声言語に比べると、より抽象的な存在形式をとっているといえることができる。

例えば、(2)'の「你的話」の存在形式は具体的な音声言語であるのに対し、(2)の「你的話」は、それが「你」から直接聞いたものではなく入づてに聞いたものである場合には、本来その情報を最初に発した者(=你)はその場にはいないため、発話時には「你的話」は音声言語としては存在せず、「我们」に対して直接にそれを伝えたものは第三者であるため、この場合の「你的話」は、「你」が発した音声言語に比べると、より抽象的な情報としての存在形式をとっているといえることができる。同様のことは、(6)の「人们说起日本社会的结构有某些与家庭组织相似的地方」、(7)の「这话」についてもあてはまり、これらが主体の耳に入る際には、主体、客体以外の第三者を介した情報としての形をとるため、最初にそれらの情報を発した者の音声言語に比べると、より抽象的な存在形式となっている。

一方、(4)の「风声」は「うわさ」であり、文脈に関わりなく、それ自身が抽象的な概念を表わす成分である点で、上記の「你的話」、「人们说起日本社会的结构有某些与家庭组织相似的地方」、「这话」とは異なる。

同様の例としてはさらに、

(12) 她听到这个消息后才松了口气。

(12)' 她听见这个消息后才松了口气。

が挙げられ、(12)'よりも(12)の方が better であるとされる。(12)、(12)'の「消息」は「ニュース、情報、うわさ」であり、(4)の「风声」と同様にそれ自身は必ずしも音声という形では存在しない抽象的なものである。

このように、主体が入づてに情報を耳にするということと、その情報が抽象的な概念としての性格を有するということは関連性を有し、そのようなコトガラを表わす場合には、「听见」よりは「听到」が用いられる傾向が存在する。

また、

(13) 他听到一点儿动静。

(13)' 他听见一点儿动静。

における「动静」は、「消息」と同じく「うわさ」という概念を有すると同時に、「声音」と同じく「音」という概念をも有する語であるが、いずれの概念を表わすかは、「听到」、「听见」のいずれと共に起るかによって相違が見られる。すなわち、「听到」を用いた(13)においては、「うわさ」という抽象的な概念を、「听见」を用いた(13)'においては「音」という具体的な概念を表わすのであるが、このことは、それぞれの表現例に対して以下のように適切な前件あるいは後件を続けるとより一層明白となる。

(13)'' 现在正在评职称, 他听到一点儿动静, 他已经被内定为副教授。

(13)''' 他听见一点儿动静, 是不是进来小偷儿了。

(13)における「动静」は、「彼がすでに助教授に内定した」という情報を指しており, (13)''における「动静」が具体的な物音を指しているのに比べると, より抽象的な概念を表わす成分となっている。

これに対し,

(14) 我听到了一阵脚步声。

(14)' 我听见了一阵脚步声。

の場合には, 「一阵脚步声」が具体的な音声を表わしていることは明白であるため, 表現の整合性という点において, 両者の間に優劣の相違は見られない<sup>9)</sup>。

さらに,

(15) 禅寺的晚餐比普通家庭要早得多, 一般为午后四点。天还没有黑时便一切收拾停当了。

晚上七点至九点, 全体僧人都集中在僧堂, 座禅。然后鸣钟, 听到鸣钟, 僧人们便鱼贯进入老师房屋, 去和老师讨论公案问题。由于有人座禅, 所以僧人们就寝的时间很不一致, 一般似乎是在夜里十一时左右。

(15)' 禅寺的晚餐比普通家庭要早得多, 一般为午后四点。天还没有黑时便一切收拾停当了。

晚上七点至九点, 全体僧人都集中在僧堂, 座禅。然后鸣钟, 听见鸣钟, 僧人们便鱼贯进入老师房屋, 去和老师讨论公案问题。由于有人座禅, 所以僧人们就寝的时间很不一致, 一般似乎是在夜里十一时左右。

の場合には, 文章全体の内容から, 「鐘が鳴り, その鐘の音が聞こえると僧侶たちは師匠の部屋に入って, 公案について師匠と討論する」という動作が習慣的なものであることは明白である。習慣的な動作は, 個別の具体的な動作に比べるとより抽象的な概念としての性格を有するため, 「听到」を用いた(15)の方が「听见」を用いた(15)'よりも better であるとされる。

### 1.3 意志性を含まない「听见」

「听到」と「听见」との間には 1.1, 1.2 で述べたような相違の外, さらに, 前者は主体の意志的な動作を表わすことがあるという点で後者とは異なる特徴を有する。

例えば

(16) 这对夫妻只好站在天河两岸哭泣。后来王母娘娘见他俩没日没夜不停地在哭, 也被感动了, 于是就允许牛郎织女每年七月初七晚上会一次面。到时, 成千上万的喜鹊飞到天河上架起一座桥, 让他俩团聚。到那天, 至今还听得到牛郎织女亲密的说话声呢!

(16)' 这对夫妻只好站在天河两岸哭泣。后来王母娘娘见他俩没日没夜不停地在哭, 也被感动了, 于是就允许牛郎织女每年七月初七晚上会一次面。到时, 成千上万的喜鹊飞到天河上架起一座桥, 让他俩团聚。到那天, 至今还听得见牛郎织女亲密的说话声呢!

の両者を比較すると, (16)の「听得到」には「牛郎织女亲密的说话声」に対する話者の関心,

すなわち、「牛郎」と「织女」が仲良く話している声が聞きたいという話者自身の意志・願望が込められているのに対し、<sup>6)</sup> (16)'の「听得見」には上記のような話者の意志・願望は込められてはいない。但し、(16)、(16)'においては、文章全体の内容から、「牛郎」と「织女」が仲良く話している声を聞きたいという話者の意志・願望が込められていると見る方が妥当であるため、前者の方が後者よりも better であるとされる。

(16)と(16)'との間にこのような相違が生じるのは、「-見」には、前の動詞が表わす動作の意義から意志性を失わせて無意志動詞にする働きがあるのに対し、「-到」にはそのような働きはなく、「-到」は主体があらかじめ意図して動作を行なった場合、主体が意図せずに偶然に動作を行なう結果となった場合のいずれにも用いることができるという点に起因すると考えられる<sup>7)</sup>。

また、

(17)以前说起“私房”，联想到的是家庭成员个人攒下的“私房钱”或不愿被外人听到的“私房话”。

(17)'以前说起“私房”，联想到的是家庭成员个人攒下的“私房钱”或不愿被外人听见的“私房话”。

の両者を比較すると、(17)は、「他の人に聞かれたくない」という話者の主観的な判断を(17)'よりも強く含んだ表現であるという相違が見られる。上記の表現例には、話者の被害意識を表わす「被外人」が含まれおり、「听到」、「听见」はそれに後置されているため、「耳にする」という無意志の動作を表わす「听见」を用いた(17)'よりは、意志をもって積極的に聞こうとする動作である可能性を含意する「听到」を用いた(17)の方が、主体の「話を聞かれては困る」という判断との間に整合性を有し、better であると考えられるのである。

さらに、

(18)昨天的报告特别好，但是我有别的事，没听到。

\* ? (18)'昨天的报告特别好，但是我有别的事，没听见。

の両者を比較すると、前者は、「昨日の報告はとてもよかったが、私は別の用事があったので聞くことができなかった」という内容を表わす表現として成立するが、後者は非文もしくは不自然な表現とされる。上記の表現例においては、話者が「報告」を聞きたかったことは明白である。すなわち、「聞きたい」という話者の意志・願望があった上で「聞くことができなかった」ため、(18)'においては、このような内容と、単に「聞かなかった」という事実を表わす「听见」との間に矛盾が生じ、非文もしくは不自然な表現とされるのである。

(18)、(18)'と同様に、

(19)电话机里老嗡嗡响，听不到对方的话。

(19)'电话机里老嗡嗡响，听不见对方的话。

の両者を比較すると、(19)'は単に「雑音が多くて相手の話が聞こえなかった」という事実を表わす表現であるのに対し、(19)は、「(いろいろな方法を試してみたが) 雑音が多くて相手

の話が聞こえなかった」という、相手の話を聞きたいという話者の意志をより強く含意した表現であるという相違が見られる。

また、

(20) 要涨工资的消息, 你听到了吗?

(20)' 刚才我的话, 你听见了吗?

の両者では、(20)は、「賃金上がるという話を、あなたは聞きましたか」という内容を表わし、「要涨工资的消息」は、「你」がそれを聞くことを欲することは容易に予測されるものであるのに対し、(20)'は、「今の私の話は、あなたはわかりましたか」という内容を表わし、「我的话」は、「你」がそれを聞く意志をもっていなかったために聞いていなかった、あるいは聞きたくないものであるためにわざと聞いていなかったと話者が判断し、さらに、「你」が聞く意志をもっていなかったことに対する話者の不満の気持ちが含まれている<sup>8)</sup>。

一方、

(21) 因为他没有好好儿听, 我说的问题他没有听到。

(21)' 因为他没有好好儿听, 我说的问题他没有听见。

においては、「他」が私の話を聞く意志をもっていなかったことは前件の「他没有好好儿听」から明白であり、このような前件の内容との間に整合性を有するのは「听到」ではなく、意志性を含まない「听见」を用いた(21)'の後件であるとされる。

また、

(22) 最近你听到好消息没有?

? (22)' 最近你听见好消息没有?

の両者では、「好消息」は明らかに誰もが聞きたいと願うものであるため、「听到」を用いた(22)は自然な表現として成立するが、「听见」を用いた(22)'は不自然とされる。

これとは反対に、

(23) 她一听到这个消息就吓得几乎要下晕了。

(23)' 她一听见这个消息就吓得几乎要下晕了。

においては、「这个消息」の内容が、「他」が気絶しかけるような思いがけない情報であるため、このようなコトガラを表わす場合には、意志性を含まない「听见」を用いた(23)'の方が better であるとされる。

さらに、

(24) 你想什么来着? 我叫你好几声都没听到。

(24)' 你想什么来着? 我叫你好几声都没听见。

は、「あなたは何を考えていたのですか? 私は何回も呼んだのに聞こえなかったようですね」という内容を表わし、「你」が私の呼び声に注意をはらっていなかったことに対する話者の非難の気持ちを含んでいるが、このような場合には、聞きたいという主体の意志を含意した「听到」の表現、すなわち(24)よりは、主体の意志を含意しない「听见」を用いた(24)'の方が



better であるとされる。

#### 1.4 内容理解を含意する「听到」

ところで、(17)が(17)'よりも better であるとされるのは、前述したような要因の外、さらに、「私房話」というものは単にその声を聞かれないのではなく、その内容を聞かれないものであるため、単なる音声を耳にすることを表わす「听见」よりは「听到」を用いる方が表現の整合性が高くなるためである。このことは、換言すれば、「听见」は音声を客体としてとる成分であり、その客体が言語であったとしても音声の形をとっているものに限り、それが表わす内容までも理解したか否かについてはあまり問題とはしないのに対し、「听到」は、客体が言語である場合には、単に音声としてそれを聞くばかりではなく、その内容までも理解することを表わす傾向があるということである。このことは、例えば

(25) 一听到要交学费，他就不来学校了。

? (25)' 一听见要交学费，他就不来学校了。

の両者を比較すると一層明白である。(25)、(25)' はいずれも「学費が必要だということを聞いたとたんに彼は学校に来なくなった」という内容を表わすが、彼が学校に来なくなった原因の「学費が必要である」は抽象的な情報であり、彼がその情報の内容を理解した結果として学校に来なくなったのであるため、「听见」を用いた(25)' は不自然な表現とされる。

また、

(26) 我听到了远处传来的歌声。

(26)' 我听见了远处传来的歌声。

の両者では、(26)の方が better であるとされるが、これは、「歌声」の内容までも話者が聞いて理解したことを表わすためである。

これに対し、

(27) 老金听到了同志们的喊声。

(27)' 老金听见了同志们的喊声。

の両者を比較した場合には、「喊声」は、言語というよりは単なる音声に近い性格を有しているため、両者の間には、表現の整合性という点において何ら優劣の相違は見られない。

但し、以下のように、客体が非言語的な音声の場合であっても、例えば

(28) 我听到一种奇怪的声音。

(28)' 我听见一种奇怪的声音。

では、前者は「奇怪的声音」の正体について話者が一定の推測をした上で用いられる表現であるのに対し、後者はそうではないという相違が見られる。(28)、(28)' に対してそれぞれ後件を続けるとすれば、例えば

(28)" 我听到一种奇怪的声音，是不是洗衣机又出毛病了。

(28)'" 我听见一种奇怪的声音，但不知道是什么声音。

のようになるが、(28)''は、話者である「我」が、「奇怪的声音」はひょっとしたら洗濯機が故障した音かもしれないという推測をした上で用いている表現である。話者は以前に洗濯機が故障したときに出す音を聞いたことがあり、発話時に聞こえている音はそれではないかと判断しているのである。これに対して(28)'''は、「奇怪的声音」が聞こえたけれども何の音かまったくわからないという内容を表わしている。このことから、客体が非言語的な音声である場合、「听到」を用いると音声の正体(=内容)について主体が一定の理解をしているというニュアンスを含んだ表現となるのに対し、「听见」を用いると、そのようなニュアンスを含まない表現となる場合が存在することは明白である。

(28), (28)'と同様に、

(29)你听到过火箭发射时的声音吗？

(29)'你听见过火箭发射时的声音吗？

においては、前者は、聞き手である「你」がかつてミサイルの発射音を聞いたことがあるだろうと話者が判断した上で用いられる表現であるのに対し、後者はそのような判断を前提とはしていないという相違が見られるが、相手が「火箭发射时的声音」を聞いたことがないという前提でたずねるのが通常の状態であると考えるのが妥当であるため、(29)よりも(29)'の方が better であるとされる。

さらに、

(30)你听到过这种声音吗？

(30)'你听见过这种声音吗？

も、「あなたはこのような音を聞いたことがありますか」と聞き手にたずねるのは、通常は、聞き手がそのような音を聞いたことがないということが前提となっているため、(30)よりも(30)'の方が better であるとされる。

これとは反対に、

(31)我认为他听到过这种声音。

(31)'我认为他听见过这种声音。

は、表現の内容から、「他」が「这种声音」を聞いたことがあるだろうと話者が判断しているのは明白であるため、(31)'よりも(31)の方が better であるとされる。

上記のように、「听到」を用いた(28)～(31)はいずれも、主体が発話時以前にある音を聞いたことがあるだろうと話者が判断した場合に用いることができる表現であるが、主体が発話時以前に音を聞いておれば、発話時においてそれが何の音であるかを理解する可能性、すなわち音の内容を理解する可能性が高く、このことは、(17), (26)に見られる「听到」の特徴、すなわち、客体の内容を聞いて理解することを表わすという点と相通ずる。

### 1.5 動作的な「听到」、非動作的な「听见」

「听到」と「听见」との間に見られる相違としてはさらに、前者はより動作的、後者はより

非動作的な概念を表わすということが挙げられる。

例えば

(32) 听到上课铃响了。

(32)' 听见上课铃响了。

に適切な前件もしくは後件をつづけるとすれば、例えば

(32)'' 听到上课铃响了，就走进了教室。

(32)''' 正想上厕所（时），听见上课铃响了。

のような表現となるが、(32)'' は、「授業のベルを聞いて、教室に入った」という内容を表わし、前件の「听到」は後件の「走进」とともに、時間的に前後して行われる主体の動作となっているのに対し、(32)''' は、「ちょうどトイレに行こうと思っていた時に、授業のベルが鳴るのが聞こえた（鳴るのを聞いた）」という内容を表わし、前件と後件とは時間的に前後して行なわれる一連の動作ではないため、「听见」はより非動作的な概念、すなわち一種の現象に近い概念を表わす成分となっている。

(32), (32) と同様に、

(33) 我听到有人说话了。

(33)' 我听见有人说话了。

に対しても、例えば、

(33)'' 我听到有人说话了，向发声的方向看了看，原来是几个孩子在闲谈。

(33)''' 我听见有人说话了，是不是有人进来了，咱们换个地方说话。

のように後件を続けることができるが、(33)'' の「听到」は後件の「看了看」とともに、時間的に前後して行われる一連の動作を表わしているのに対し、(33)''' の「听见」は、「我听见有人说话了」の中において、それ自体で完結したひとつの現象を表わしており、後続の「是不是有人进来了」は、この現象に対する話者の判断を表わしている。

また、

(34) 我听到的声音是从教室传来的。

(34)' 我听见的声音是从教室传来的。

は、「传来」が含まれていることから明らかなように、「声音」が教室から伝わってきたものであること、すなわち、「我」が「声音」を聞きたいという意志をもっていなかったにも拘わらずそれが耳に入って来たことを表わすが、動作は、通常は主体の意志によって行われるものであるから、それが主体の意志を含まない場合には、その分だけ非動作的な性格を有し、一種の現象としての性格を帯びているということが出来る。従って、上記のような場合には、「听到」を用いた(34)よりも、「听见」を用いた(34)'の方が better であるとされる。

さらに、

(35) 在波浪声和叫喊声中，可以听到确乎是那条船的气笛在断断续续地呜呜叫。

(35)' 在波浪声和叫喊声中，可以听见确乎是那条船的气笛在断断续续地呜呜叫。

は、いわゆる「現象文」の形をとっており、主体の意志とは関わりのない一種の現象に近いコトガラを表わしていることが形式上明らかな表現であるが、<sup>9)</sup>このような場合にも「听见」を用いた(35)'の方が「听到」を用いた(35)よりも better であるとされる。

(34), (34)' 及び(35), (35)' は反対に、

(36) 这种物体发出的声音太小, 我听了半天也没听到。

(36)' 这种物体发出的声音太小, 我听了半天也没听见。

は、「この物体の発する音はとても小さいので、私はいくら聞こうとしても聞き取れなかった」という内容を表わし、主体がその意志によって物体の音を聞こうとしたことは前件の内容から明白であるが、このように、主体の意志的な動作の結果として音が耳に入ったことを表わす場合には、「听见」を用いた(36)'よりも、「听到」を用いた(36)の方が better であるとされる。(『コミュニティ政策学部紀要』第4号に続く)

#### 註)

- 1) 「V到」における「-到」が表わす結果とは、「動作が実現という到達点に達する」こと、すなわち「動作の実現」であり、これは「到達する」という「到」の語彙的意味から生じるものである。「動作の実現」が動作の結果となり得るのは、中国語の動詞が一般には動作の過程のみを表わすためである。一方、「V见」における「-见」が表わす結果とは、Vが感覚動詞である場合には、動作の結果としての映像、音、におい等を感覚器官によって感じとることであり、やはり「動作の実現」であるといえることができる。
- 2) (2)''の後件には「全」が含まれており、これがあることによって前件との整合性が増すが、不可欠の成分であるというわけではない。
- 3) 「听见」を用いるのであれば、例えば「我听见了老王说：“县里新来了个县长。”」のように、うわさの具体的な内容を表わす表現とする方が better である。
- 4) 「-见」が補語となる場合に、主として感覚動詞に後置されるという点については、《现代汉语八百词》商务印书馆 1983p. 262, 『中国語教科書(上巻)』北京語言学院編 光生館 p. 248, 項开喜 1997「与“V到NP”格式相关的句法语义问题」《语言研究论丛(第七辑)》南开大学中文系《语言研究论丛》编委会编 语文出版社 p. 160, 刘月华ほか 1983《实用现代汉语语法》外语教学与研究出版社 p. 332 を参照。
- 5) 但し、(11), (11)'の場合と同様に、「-到」を用いた(14)は、主体である「我」が別の音を足音と勘違いしている可能性があるのに対し、「-见」を用いた(14)'はその可能性はない。
- 6) (16)の「听得到」は、話者(書き手)自身の意志・願望を表わすと同時に、聞き手(読み手)もそのような意志・願望を有するであろうことを前提として用いられているとされる。
- 7) 「-见」が動詞を無意志動詞化する働きを有するという点については、香坂順一 1983『中国語の単語の話—語彙の世界』光生館 p. 36 を参照。「-见」のこのような無意志性は、「打听」に後置してみるとより一層明白となる。例えば「C城大学中文系想方设法打听到我的下落, 把我召了回来。」の「-到」を「-见」に置き換えると、「たずねる」という意志的な動作を表わす「打听」と、動詞を無意志動詞化する「-见」との間に矛盾が生じ、非文とされる。  
また、「-到」が主体の意志による動作の実現、主体の意志によらない偶然の結果としての動作の実現のいずれをも表わすことができるという点については、成戸浩嗣 1999「中国語の“到”とそれに類する表現について」『コミュニティ政策学部紀要』第2号 愛知学泉大学コミュニティ政策学部 p. 31 を参照。
- 8) (20)'が話者の不満の気持ちを表わしていることは、「刚才的话, 你听见了没有?」のように表記することによって一層明白にその気持ちを読み手に伝えることができるが、会話の場合には、話者の語気

よりそれを伝えることとなる。

- 9) (35), (35)' は、主体を含んでおらず、「在・トコロ+V+N」の形式をとっているという点と、主体の動作ではなく「汽笛の音が聞こえる」状態を表わしているという点において、純粋な動作表現に比べると、現象文により近い性格を有していると考えられる。